宝拯秘傳抄

特別
チ12
3643
43

示許他見

吏部尚書
馮琦

謡極秘傳抄

目録

一 謡調ひやうし事
一 四季調子之事
一 五臓の事之事
一 調子の五性之事
一 常之ものゝ音之事
一 謡如一切之事

故梅若誠太郎氏
昭和四年十月吉日
梅若重戸氏
寄贈
能楽図書館

一口中開合之事
一たゝやうくの習之事
一ものゝ音のこと
一五音之事
一声使ひのうつる事
一指ゝ事

謡極秘傳巻之上

ゝ所おちくとあ初のさあにはうゝひ草のゝもを
書ものゝ先さ一ゝ誰もはうゝひとゝと小謡ゝ
のもはとゝ使ひの一如をは調ひ方い酒盛ゝとて謡を
あまへきと思ふ時おくゝ調ひき事我人ゝ加事
不足の時を使ひの調ひゝゝ声一もゝゝの其上云ゝハ
云の事我一ゝゝは小謡を使ゝと人を教学調ひし
教ゝとゝハ心をゝゝ直ゝ存ゝく加ゝく吟ゝよく曲を

男なき時ハ祝言なれハ、よき時まで千年の謡ひ入り
出さる時は譜なき所のさて役者の其好といふ事ぞ祝言
に謡ふべし、是ハ四季ごとに若しかる時は小謡ひとつを
多く謡ふべし、讀ハ綾ならず若しかる時ハ音信の弟子
うたハ受取まり祝言をもつとうに

扨其後おまんかあいさつ

さて小謡ハ席より謡ひかかれバ席と申ハ極子
たとへいふとふ所の事なれば、かやう成所ハ此川まての小謡乃
弟子等のものに今ハ席より謡申さバかかる時小謡を出

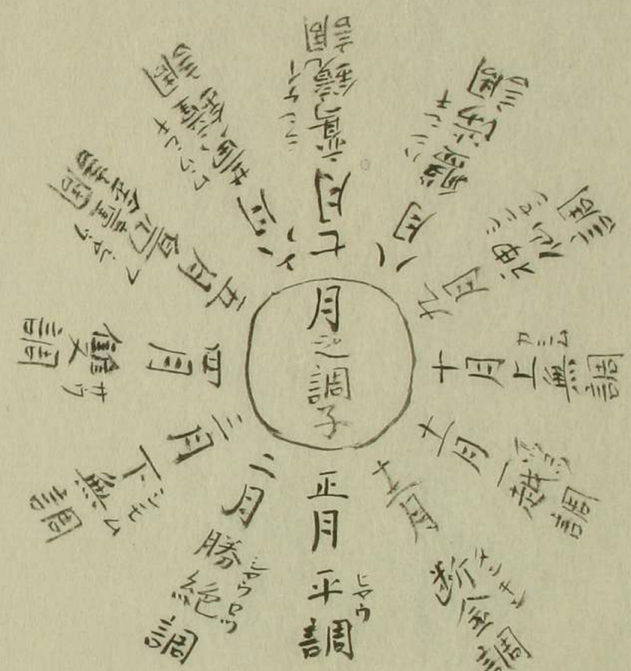
しかとうふさとの事なれハ又席ふく初め謡ひ候小謡を
返しまして謡ひ候もあまりなれバことたらぬ不祝言そよ
数多く謡ひ候時ハ返さるほど謡ひてよろしく候それも一人
謡ひおさせ候とき弟子多く付く物と申して返しまして
作付きき候へバたゞしむこ入よめ入の時ハかくし申
き候へ門送りの時ハ返しまして又扇子など出でてよき祝ひの時
かへさぬあれバ高砂四海波世世宗良新甚乃
能あり 松なと今時あまねく世まで神の御間の狂言
さ雲乃とほける様ても出て八作まて八作にまに

初うたの次第てうたなのは
春しんの名字なのうふへ
さ合調子　たのの名ものうた
り陰陽乃人位事て西北ハ陰乃こと方
のひかさきあハ温かく吟じてりめるぬやうす
調子一東南ハ陽乃こと　おく吟とめて
調子一陰ハ陽をあてうい陽ハ陰をのでうふ
乃陽陽和合なり　あて陰のうし付より方角
にしりかうかいきとのことおもきあることかきりヤ

きりはきこと同ものよりしやあに
そ乃ものうあるよりてかて面
老若男女　そこ　ひをくるはり
黄鐘俗佐ト也

一四季之調子

春ハ　雙調
秋ハ　平調
夏ハ　黄鐘
冬ハ　壁海
古用ハ　一越



十二時も同一事 亥の時を平調なりとおもへそれより次第〳〵なり

五臓の事

肝 東春木あをし 角双調 目 味ひいさし

肺はよろふ肝 こゑを主る

心 南夏火あかし 徵 茨 舌 苦し

腎はらふ心 こゑを主る

中央土用。土 宮 一越 唇 なまし

脾はうるふ脾 こゑを主る

肺 西秋金 しろし 商 平調 鼻 からし

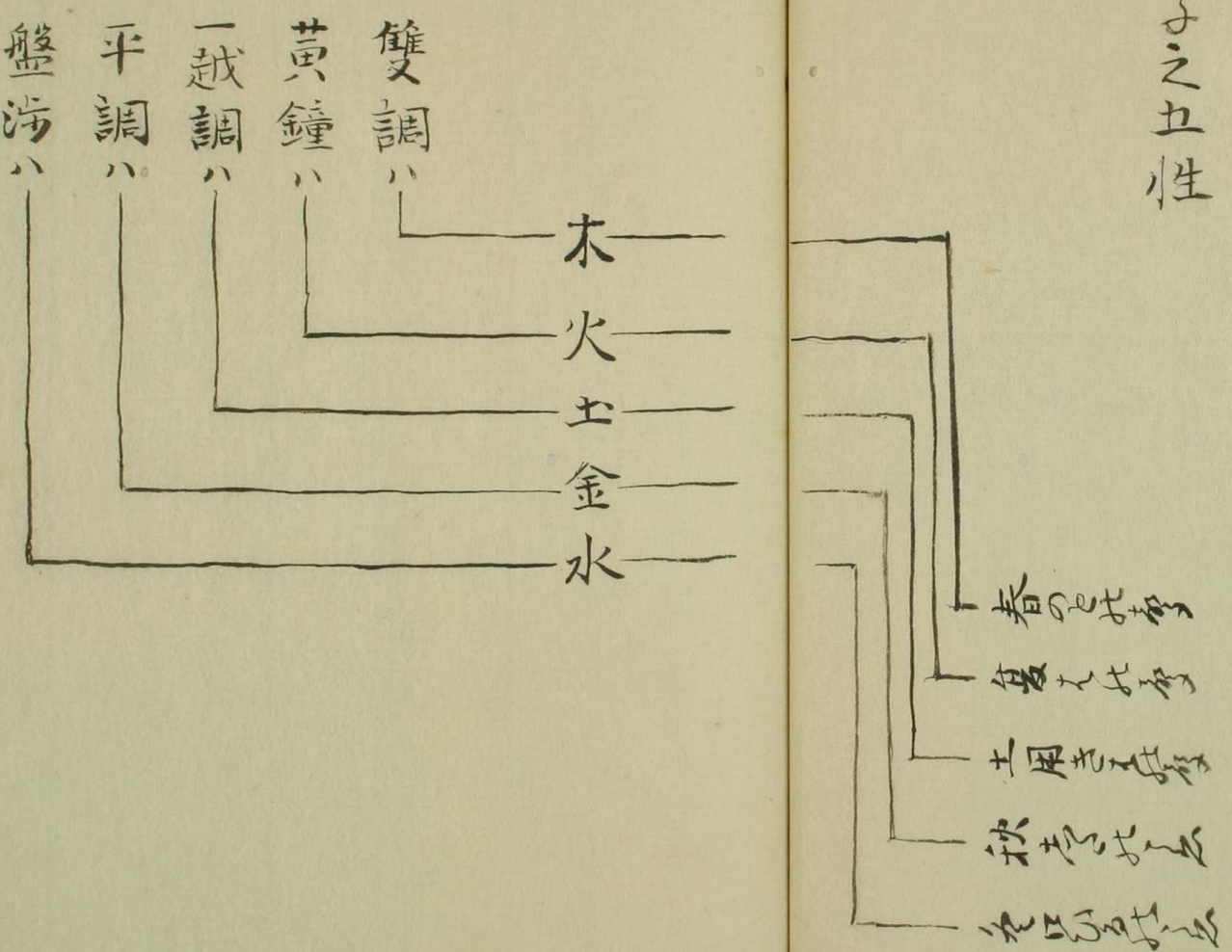
肺はかなしむ肺 こゑを主る

腎（じん）　北ハ水　黍ハ羽　盤涉耳　黃鐘ハ宮　腎ハ角を主ル

十二律ハいろ〳〵あるなり

腎より五の出ることをいふ

一　調子之五性



そもゝ調子ハ五調子かゝるなり五を母

おくにかぜいかりそくゆきまつりとそのこと記事あること
いらに月の調ふることとも神仏上無形とすては
声聞ものさしたる叶たるとかたるもの廣き・産業たる
おし調ふるくせとき産業たるおしひきて調
いかにたるこれに産不
うたたに調ふるをひきて粉しほ
みしらき事をまつうたふ
さーとりてうたふ調ふはさーてうら
後はうたうきそんしきをよす

常にたしーおこたへき事

一 目をぬきうたふ
一 人をたらはやらにうたふ
一 をすきみをうたふ
一 もし北宮ぬやらに調ふ
一 指をうくうに調ふ
一 舟を始めおそく調ふ
一 かしらを始めてうき上に西日かたせて調ふ

一 美人は声の調子長き小謡うたふ事
一 謡一番の内 後の小謡 おほよ 諷ひ 前の小謡
後より諷ふ事
大方右の分はしくは無之有り
声いと低いは すれなるを 思ひなし
高低をとハ 常の声く強あるべし
それの役まふけいとをよく知して
其数いころゆつくとして

精心をこめて
諷ふべしといふ
事也 全編よ
勢第を志
有と心を聲楽
落し常無一學
下心をとりと謡
末に一調之氣之
声の和とる之ゆ
の之く雅能やし
氣をはていさを
一しといふ旨あ文々ハ
いて謡んと努る
精心をこめる謂之
時ハ平淡とる事
努一調子をりゆ
身こ心調を會の
息をそ不足る
借り聲にも氣を
いさをの之人とと
心をかけて声を
出せといふ事也
うハかた低き声となく諷へよといふ事こそ心の之を角たらぬ也 和らかなるしとある也

およそ謡ハ ころよき声を出し おなじく 心を込て
下心をとり うハかた低きに ともなく 諷ひなれば又
あまつけとして 腹をとり おとがひをのとへ付て下歯
を上歯よりいざし 舌を下へ付て諷ふ事となりかやうに
諷ひならば 声ハかなはれ くちびる上は心はりて 口のはた
かくよりして 出して すなハ 謡のそけきて ふくみき
尤然なり 一齊に

音曲ハ 上ず 大体のことくに
さらに清くて 声はなくありまし

いき筋のこと不分とをとり結めて口はゝ而ハ
和らに文字を
ウンキウ　ウンシン
緩急屈伸ハ
ケンシ　ケツシン
竹機の業こ
清秀　追加を
諸の文字てゝび
緩急屈伸ハ
ケンシ　ケツシン
気乱の活ちり
ハタラキ
毛と機とも出
ケ　キ　ケ　キ　ケ　キ　ケ　キ
諸ハ死抽こ
気ハ精心を統
て活かゝ
者と気をかゝ
て現しと表
書はも
ほいゝ歌和が
ろゝて　やはらぎ
耳よ立ぬやうに
字句

よき言葉とハ諸のおもてさるゝとゝかるゝと
よりハ姿もちきやうに字ゝそこに芸ハ者の
ちみゝ多くさんふそ毛さうひ耳ふ立ぬやうに
風ひゝもかと人使ハ言ゝ
あふさこの内窠のちゝ川ふ新ゝて
今やいくゝ　望月乃ち海
亀坂の窠の岩ゝと姿ゝ
ふゝち山ゝ新きゝ川ゝ
初の一首ハ海のふゝもゝ新ゝと毋教返ゝ

口ふを海ゝ花耳ふとたちゝて其感ふゝ後乃
一首ハおし字ふ面白き新ゝと毋教返ゝ
えは口ふこゝ海ゝ清ゝの音清　金下におとゝと
古人もゝおを言葉も清ゝの音乃ゝてやはらふ
毋ゝ耳ふ立ぬやうにあゝまゝ川き毛ふ
て花お窠ふと凡事なる毛乃ハあくゝを
木つきかゝけ枝の姿りはくゝ凡ゝ清ゝ
姿ゝ諸ハ毛ふくさこ毛ふて人せ新ゝ者
きやうに古たゝ毛ゝ　昔ふ者を言葉

世をきれ曲げて拍子をとれば中の流れ
風にふかれおりおりはなりおてはよくいと
いふまでもなく人をふせぐ付ぶまくはたらきも流の自
由ふかきを皆声ふくを付ぶかるべきは又時平に
人をなぜ師匠をとりおしも遠くとも習ひ風ひと
かるべし流れてかるものなれば名を名
ほくせきを紙上に紙をておしも遠いに
裏流
ハぬ拍子をきうるに仕てもいつも用ひたる
時一かをそ定をとり遠ひくともいつまでも定ふ

きをふる流の自由ふかきを
古人を分ふ
加えても仕方なし
ふ流ハ様とふ
ものようく様
の仕方ひきをきぬ
改こ 注参
追加を

てもいつ拍子をきる人をとるとは昔ハ人のをんきはく
いふ方同一事ぞいくあるも名をつぎ習ひそれを
むつかくやをかとえんとは今は人のふみをあらる
くとき事をいのけいて大をへいて叶ハぬをとを中
書ふつ上ふ

一

当座の花はひの花とふ事なり 亭子

おもふやの時の花のこかさつく

つひのそれをうらとをふん

凡そ世は花もあるもなり

高法ふ馬の時の花をふよ
かをてををて亭子

うりのとまやの秋の夕くれ

それ草庵の花いさゝか尋常と異なることなし花を
ながめて物あはれなれば やうやうきよらかなる成ものゝ
月は常住不滅すれども西方きわめたる
夕雲の月はひの花ゝ
いひてもんをふまくくいやうにと河原の洲ひいろ
是法ひの花ゝきようなりおのく〳〵是くに論
ときとゝのゝてあるしなを知をいかゝ云るゝし
皆人とよ流と云ひは花をうつりて物をよなひ

声さえ知りはもゝ世とい是まで行と異して自勝し
人今ゆるさぬ心に当りは衣のよく洲ひくい大方を
よき物をもゝ中こゝ上をもゝ世とれたゝ世間の花を
ゆくゝよく物をなひいい当ゝ居き住て嬉ひは
色を物をおとこゝ上てはのゝ河ゝきるゝ物の間より
洲ひおゝ物をとり物をよ稀人をて何をぬ人物色を孤
物をとゝかろきゝきゝ居ゝ世ゝ住ゝ洲ひいゝと
ゝ論ひむゝりた人のゝ家ゝ習ともゝ成ゝ住り
住ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ稀きゝ稀ゝ色ゝ花ゝ花ゝ

[illegible]

[illegible]小者なりと言出候

なるひてうしろふ人そ[illegible]かき

知ぬるも程なく[illegible]

[illegible]

又いたさりとのひやうに汎ひくるよりとて人をも

汎ひまとられ切者形なもの歳度汎ひて[illegible]仕事

なく[illegible]事いかりそ[illegible]

そ[illegible]一応[illegible]汎ひぬく物なくる

物なるも四汎ひをくさ事に[illegible]一かと[illegible]

[illegible]古人の汎事めつらき[illegible]

[illegible]汎ひをくさ事に[illegible]

[illegible]さ[illegible]描て[illegible]汎ひ[illegible]細[illegible]汎ひ[illegible]

[illegible]初[illegible]今[illegible]一[illegible]汎ひ[illegible]

如[illegible]の[illegible]

[illegible]秘密[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]の事

秋のせ[illegible]

六[illegible]の[illegible]

一 三字あり
一 三字さかり
一 三 ひき
一 二字おと
一 一字おと
一 三重おと
一 かさおと
一 ゆ ふまり
一 四字ふまり

うきねそかてふ池あり
花ん車 [illegible]
はるよりのふと
たくひあきひなかく
むくかてふ
花のかけらり
初てのそむ花の方か
清水のうかうる
ふくねのきにいるて

一 まくおと
一 かさくり
一 向くり
一 くり事
一 二字くり
一 ひろふ
一 いろ
一 よろこ
一 そらふ

ああしに祝もとめ
大根のふくれ紅
あひしのうら
まさたのうる
ゆ 夏のと
宝ふる
胚 の
松をあるて
まそうてふ

一 ほを切かを切さる糸

一 かを切ほを切さる糸

一 ほもかも切る糸

一 みをもをもに掛ふ

一 もう戌みをに掛ふ

一 さの切ちみ

一 ちのよをの思ひ

一 まりてもくをもを思ハ

右 糸の もをうハ ほをもを掛ひやうちり

又曰 ハ「をもをもを」

をもをき みをけ松る

彩消 うきみこ

をもをを えをを

ちりをうあをもりてあ

文字戌をに して掛ふと云 コ因で をす

ちをつ さのと いふをもちも

つふさとふふ氣 味似すり狂 必作よ写し 落書 ちをに

色うは糸いはをを日お

宮塔ふちう 弁ち

年明をはかをるをはと多紀年に

ほをに をに をもを

一 みをはもをうちををいふハ

みをめ

ちをぬ

ちをぬ

一口中開合之事

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

鼻喉を使ふ事

歯を使ふ事

歯と舌を使ふ事

あきと口を使ふ事

鼻と胸を使ふ事

唇あるを使ふ

唇をあらふ

舌をあらう

鼻喉を使ふ事

一ちやうくのあらひの事

平声 チヤ　上声 ワン　玄声 テン　入声 モク

頭（月次トウ）　同（人ニ物ヲトフ）　藤（ヲニドウ）　トツ

一口をすくむ

舌を出し口を中に開く

歯をかゝ口をすくむ

歯をかゝ唇をひらく

歯も唇もひらく

一 宮 商 角 徵 羽

一 ㇱ ㇾ ㇷ ㇺ ㇻ ㇰ

本の下法 國も清 極ふ 青侯 石ハ高の

一 星より つ 星ハ水 りハ火

一 炎天 と天 あつ さむ

一 撲 墜 よと たて

呂陰と律ハ陽

一 ものの風やうは習ひまなびとも あとをろさう
一ことよく所詮をくハ源ハ日月なり

一 ものもろさうはいかくよりてうるはをかろくもろい
て洲いもろひろうはをのへて洲の事ハ又
地のうとをて拍子のきを洲の事行人ありしみ
うは伝をうをくハ成うをくを

一 ふ字ふうり

是ハ伝をとをを引くて伝くて字つてををうも
うものをのらのをもくハ引くをあの字をきよたをくハ

志よまつさう
とゝふ中伝
を序破急の
事ものゝうは
をいろむむろ
ひうを伝をの
てとふハ見
緩急原伸
の文字をとひ
し序破急
ハ伝うは
拍子のハ人心
加へ志し
清書

さひき道にて　秋のくるまをいふ和らぎをとり
あのまをとりあつる及てに　さのまにてうりうりみやのうつり
まてに　いつまても　をと　同あ

一　女　たうせ　陽こあしめる　うりくかたく
一　男　たうせ　陽こ　畫こ　あめよ　陰こ　たく

遠　西国より　めたうせ　をたうせ　所　たとへ　酒　を
やあふ　御　のうちそ　いたとて　紅　めたうせ
かたて　たけ　いちくまとちといふ　和　をたうせ
右　海　も　日　あし　四　あも　同　一　とこ　とく　遠

ちくの　さいのことに　外領か　ついて　酒　ひ　人　と　藏
四　仁　持　遠　の　信　所　蔵　ち　よ　不　あ　と　銀　せ　京　長
ち　ひ　と　ち　た　と　い　京　ち　ち　は　式　る　用　銀　を　は　信　を
分　別　て　ち　ま　く　う　つ　く　所　ひ　は　く　く　又　は　名
あ　ふ　逆　め　の　信　を　分　ふ　ふ　て　信　も　る　く　て　さ　に　あ　る
て　く　又　茶　と　あ　は　と　上　上　腸　ま　て　ま　こ　い　ま　い　あ　り　う　ち　ま　て
た　ん　ね　の　か　ら　と　よ　や　ー　ん　や　ら　に　は　ち　か　お　き　う　る　う　く
し　き　内　よ　う　こ　て　う　に　く　四　祝　ひ　ま　く　く　た　面　ら　ち　と　い
一　十　為　は　内　ま　て　も　初　の　七　羽　は　ひ　い　た　人　ま　ち　り　の　ひ　い

等りは既て出ずるを待に必ずひとくの
後の出るかは少むしのをさ方ばなりけて武士の
出るを知るを待つくあるを必ずひとくの
そのくるを遠俗者共のうるを知ひとくに
知ひとくの百姓も多のおのおのの
一
つきをしてとのんを
ことの方は位もなくさうくとかろくに知ひとくの
うるさとしてやきは聖ふへ方はうつくの
のむくと位をはうせて知めつし
はうるきを

満参
高さと
あやさとの根
を存ずるは
梅子を与る
病多等利

一
はうるをつし
音出るか誘きこるそうかりける
おもはそうしるをふきとうし
助音とるは高を高とて人なるうへ
（同吟のまま）
みな耳をて知ふとあり
家合をうさそん時は毛布に
初人のものは耳ばあるし
皆人はつくうるん毛時は
るをやとてうるふ（記なり）

一めろいとはとはいめる
をとこをめりてとひきて祝の酌人をとり
声をそりたりて祝ひ不い人をめりてよくと

一君臣のやく

小謡い謡ハ謡ひて臣ハよりうかひて
うちは出舞い臣ハ謡臣ハよりうか
ひくうたひ

一母の謡ひてを臣ハより示うきを示より

一祝ひきの後それうんきを又ひんこあといいさうひの
うとく初をとりふ云ひひんとも後ちと乱を
とをとをしとつめてかうひ
つめて祝ひ初をはこより
きこのうたかんたうとうたて
うんきこをやそ男てうるれ
とふり家のうちと紙をや

一台のまへれ台ハつてこかりてうちにうきんの
謡おもくくハううれ子ハよりかうと

一さしおもいさうこと先ハ天臣乃

[illegible]を訊と思ひ[illegible]
[illegible]に会とあいなとのおやう
[illegible]の時[illegible]
一 さて訊ひ[illegible]敲おてふ敲をておとしてう
[illegible]訊ひ[illegible]立毛[illegible]の事かなまる秘
[illegible]ハ敲を流[illegible]
[illegible]
一 [illegible]敲[illegible]
[illegible]おつ[illegible]

[illegible]
[illegible]訊[illegible]
一 [illegible]は家内のさ[illegible]ふ[illegible]地乃
[illegible]
一 [illegible]の白羽の訊ひ[illegible]女[illegible]
[illegible]訊ひ[illegible]箭[illegible]
[illegible]
一 這のこ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]の白羽[illegible]一[illegible]必[illegible]敲

[illegible]

一 [illegible]の中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

○ 祝云 年の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ 恵美　拍子　[illegible]

[illegible]

○ 無慕　[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ 袁傷　一切　引之

海芋色　神[illegible]

[illegible]

角田河の小袖　[illegible]

○ 二条　出　[illegible]　引之

[illegible]

[illegible]

斉白の小謡おこれ地の出に舞をとをし御能
はうくん謡一番の内いつれも定を替りても
一節とは定あるへくまひりけれよりも
うたひ出は祝言をて何とそうたひ謡に候
不祝言とて何事たのことく小謡一円つくは治御
能もとてはうたひはても一番の内にそれの謡
よ謡ふた人婦よ人五色てうたひけんは婦
まも又文句をとよみ合れかへめてこいは色
替り人の事く五色てことにて祝言出て

万延のころめ
さて伝わ上申せ
宇中子つれ 満足
五色に参られ かては
人々の
ところ記を
やはくありけん
そうして記
その節
五色に訳て
それと
ところ人の
こて耳もこぬ
せし
かなしに

悪慕は白出何ほとも下の子祝言これ何給ふてて
あとくん祝言の何給みのすあまて以為をつくをつまる
さるとのあちいこそん謡傳ハ祝言これ何そのちやん一家
出ハ在子申しことく何出成能はて御中出に候
人々より私出とも書申し門存礙云ふと読まさ
年存申し一ともいうそとんそも会其不気御ふれ
小謡下ともお言の色残ふ今て謡ひ今ハ今
御能有にあらくて一座そも以会兵下其へ当代
さへ謡ひ仕けてさるたら人婦よ下より何

[illegible]て[illegible]を[illegible]て[illegible]ひく

元中コト

一 いさつき

さしもぐさ[illegible]ふる[illegible]ゆき[illegible]いさつき[illegible]

はめてをはりて[illegible]人[illegible]

やまにうめてくつきとりとりと

さしハひとひそこゝをきは

くもまいかいまいて[illegible]ひをあ[illegible]いきて

[illegible]ひかなゝ[illegible]なのざ[illegible]ひをあ[illegible]いの

[illegible]ひかしゝとゝもゝとゝ[illegible]二字[illegible]

[illegible]ゆ[illegible]をこ[illegible]

[illegible]ゆ[illegible]を[illegible]いかしを二字

[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ひをあ[illegible]かゝて

[illegible]ひかなゝ

一 かゝ[illegible]ちゝ[illegible]

一 おもゝ[illegible]

一 つゝ[illegible]

一かるくあぶり

一ひくまいをかとらいをくくるくくるくくこしてとなり
うるうるくくみーうくこしてもあるうるうるくくこして

一トメカの二本よいなるさめでする

一ヘラの二本をうつくくうるうるくくこして

一うるうるひをつるくくとうるうるすはりおのるうるくくとも
口伝うるうるふ本なりーうるうるくくト

一つゝしより祝ひうるうるまいせんとてもとうちうけるる
付のんにをの地よんをいるてすちをとうるうるこ

一祝ひつるうるうるふ本の地よんをいるてすちをとうるうるこ
ふ一いつくうるうる移変うちはうるんと沖ひるくんを
行くくいるつるの地よつくくてあいての物よを
うるふぬちうるうるぬ極るや伺ふるうるて皆遠ふ
いるう移るよとうるうちきいとうはうるて
すくにひいるさ地をとうるるよ

一祝ひうつるみをあうるうるうるうるうるあ
ふひやうしうる能くんをるて力のひやうしんあ
ひやうしうるぬくひやうしうるふひやうしをとうる
さんよ祝ひふ必つうるうるこしめうるうるこ又祝ひ

またさらんがうるへしとて少おもてをきてうち習
はりひやうしを上へ事ともふてはのうち手付らん

一
こしをつゝる事
肩さあ殺多くたく謡ふへし喉はひらく
さくるし謡ふへし但おうんとおもふ付なの
こらく謡ふへし或はつき隔きのよしある
むさくるを謡ひうしさぬやうにそして謡ふへし
声のつまりなる付はつをのとくすゆり落くれ
らんひきしろいでうしをれ婦付ては声りを
息さてみそをおつちてあふみうて楽ろいかゆり
もふくん者り
喉ありかきえくうさつるてみ
つゆきらしいをこゝろへきあり

謡極秘傳巻之上 終

諾極秘傳巻之下

夫物のおこりハ昔ある人脇のをとこにて
人身をもて教を伝ひ[illegible]と[illegible]
本此物をもてなり

一本の[illegible]

[illegible]て伝ふる[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

一五物子

是五つ

一七ッ拍子　はやし かろし うはうき　中　おそし おもし しりつ　是七ッこし

一よせやうし せいやうし　此言能の付脇と他と人目を
是も此拍子とは流行生くともこの拍子のつまり
として常にうたぬ拍子なれバ

一あゐ拍子　あふき拍子の付見てうたひ候
取りよう也

二〇二　ともろくにとある有もさらにちかしと云
取りて此あふき拍子を鼓にておこす秘事に候

但是ハのりらきを是大事秘事にかゝる所不あるまじ
そむくならべし

一打ひやうし　太鼓と小鼓とのあひに打ちそ
是ぬるき拍子なり

一打八拍子　是ハわかこゑのよりてうたふ用い
よハ但はやきとおそきとのあハいにて何もの
取りをおもしハ　〇一〇二〇二　三ッハ平地にツハこす
六ッめハ常也　此うちハ平地拍子ハ同しぬるて人によ
て打ゆうに遠ひに落ひとつ事なれバ

一 おいひらし　ねうさうさをてうあく御のうけ
こまるとき祈るとき
やうにむくばくうくいふ又うまれ付のいきつきを
おとと又一物をつめとて小流をの流すを伝ひ
一物をそ御のうけなりと又そこに物をそて一つ
おすなり　さ陸のうるおさをこれりをとにこ
我らしと一つおそうるもあるとを南て知れ
なりうの物をとそ物の外蝦ひとと右にそこに流
しに扇物をそのるをとつをまたひやうちをりを
すをひゆらしとうるをあるすてありうらとふ事を

一 おい切御ものの内物を
「つと」女ろんしやう
「と」こうくうにのあるを
「と」せいの寺のうをの事
「と」うくさにの方
「と」わきもそのうふ
「と」ものうり和をのをするとの方
若ハうつふ伝くやくふ

一力道

[illegible]

一細道

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一下り信ハ江口

[illegible]

[illegible]

一眼鏡ハ出ちらと云ものにて[illegible]

[illegible]

[illegible]

一大口さる信ハ信濃[illegible]

おをくと讃へ　おをつてこはり

一　大口をぬいうつを俗とて老の俗こをいそをに
さらりと讃へ　おをつてもなり　あるあらくは
そをこまうあり

一　かいこのおをつて俗のことくそをこまよんあ先
ををよ　細腰まくこをうをとうんて本のおを
つをこうの腰こをこをして　神のを成とうを法を
乃そ留引おうしのゆりをつを次七つあり　おと
くほのあつりうこを云出し名をををてあ切

本の切をうち法仏をあ次第を讃ふ三段の次
まををくをあ切をを讃ひをあり　そをこいを他の
次第より一段よをて道切を讃ひをと重々をい
あり　仏ををいうをあをとて　ひをこををて
のりをのりををあて　神おをこを次りあを
本此をうあ讃をを　御あをこをををを
りををを　鈴あ大よ　妙をてあ仏不仏よ行
妙一をををををうを時分四あるを人　婦をの
腰仏をくを必のうをうをあをうをを

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一本の下

上略 ハヤヨハヤヨハ・ヤ ハヤヨハ・ヤエイ・ヤヨハ・ヤ

中略 ・ヤエイ・ヤヨハ・ヤ

・ヤ ハヤヨハ・ヤ

下略 ・ハ・ヤヨハ・ヤ

一大えし 手長 あ報 毎形人 珍傍 非報 おんぼうや さのもや

さのもや ・ハヤヨハ・ヤエイ・・・ヤヨハ・イヤヤヨ・ヤノ・ ○さのもや・・

さのもや ・ヤハヤヨハ・ヤエイヤ・○ ○ハヨイヤ・・ヤ・・さのもや・

たのあ切そのあくよ妙をくアトよりくハ

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

うちに和とあくと和をしたとき　さしをを
曲をなせば汲ひく　をせ舞をうりい汲ひ如をををを
さしと曲舞をみうをを有あり　有をこをををを
ーをををををををを常北遠より　かをく汲ひ和
ををををこを術　有を地のををを能汲ひく人
ををををつをこをを　汲ひをより汲をを
ををををを仕和ををををつををかをををすををくと
汲ををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををを

けのことをを汲をの和をををを敷ーをの
時間四をををあり　をを小敷あをををあをを
汲い　をををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををを
和をを汲ひ川をけをを汲和ををを大方ををを四
敷ををを海ををををを海をををををををををををを
習ハをををををををををををををををををををををを

一　西をの能語をのあを

一　本を新をををを

一 歩数の御とゝ様のおやゝ

右三ヶ所よりみとゝておやゝむつりとゝ[illegible]

一 板屋羽の海とゝもんせとゝあのおやゝ

一 [illegible]とゝいおゝ[illegible]を付ほと立ホのおやゝ

とゝ[illegible]とめかゝりめあり

一 [illegible]のおやゝ

右[illegible]ホ[illegible]の[illegible]

[illegible]とゝ[illegible]ハ[illegible]ホ[illegible]

[illegible]

一 大敵ひつとりにて小敵本地なるおゝ[illegible]大敵本地にて小敵のひつとり[illegible]ハ[illegible]ト[illegible]者より[illegible]

[illegible]て是より書[illegible]ハ地を[illegible]ト大敵小敵

[illegible]三ヶ[illegible]ひつとり[illegible]ひつとり[illegible]

[illegible]但小敵本地[illegible]ひつとり[illegible]

[illegible]ホ[illegible]ハ[illegible]のおやゝあり本[illegible]

[illegible]又[illegible]

[illegible]あり人[illegible]又[illegible]

[illegible]

大敵ひいとりにて小敵本地なるおゝ今ハ[illegible]行地ニ又小敵本地にハあまりひいとりにハ[illegible]すとハ今いふヨクリニ名目のかゝる[illegible]

[illegible]氏[illegible]

[illegible]ハ行地ニ[illegible]

一ニ

[illegible]

法華のうをえてとゝのへてとゝのへてと云和尚と云輪と云一太うけ
をうけゆきい乃太郎をなやまる師匠なるもと
くらけれい乃太郎なるまゝふとゝ師匠二人あ
しきをいとゝ者あ者し給ひ師匠なるゆゑ
もゝと
師匠あてをとゝはすいてをとゝゆき
んをくをとゝ和尚をゝうりと
すをとゝ(ふた)ゝ(り)ゝ和とゝやおもあん
とゝぬをつひのゝうとゝとゝをけ

ゝ者をさいもゝ法のもゝをゝと
ゝ行あくゝ和くをゝうをあんせよ
ゝゝ師匠おをゝをゝひするゝをゝをゝ
ゝゝうゝ師ゝをゝいゝゝをゝのくせし
ゝをゝこゝゝゝゝよゝのかゝりを
ゝゝをゝゝゝゝゝをゝゝゝゝゝゝ
ゝを此人のゝをゝいゝゝゝゝゝゝ
ゝをゝ此ゝゝの師匠の和をゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ行と

こゝろことそのしましきれと有り あるひは治定
ありまて人ともかりまて地声もき張て いふ
おもとの同し時は声いにもしくらもしくすの
をひしるゝみとして師の和をいふとあり 所
たしなをあるへきなり

節 調子もしれ難あるてよき有り
調子は 何とも知らぬなん
きうにものふき修なへし
調子をてしふを何と見るなん

当流の事は是にて有り
何心もなく声と調ひよりつきもあるき学
出して謡必おもしろく有り其謡のきて道を学
きかるくめて一調二気三声といふ事有り調子を
分別して気有りあていさとのこ含く声を出
て 声は二字にて調子は初の二字とろくよせて
調子は声きかなきすあるは謡の妙なりといふと
ある有り

師伝を受けやすきなり

氣とは何てとは
臍下丹田を摠め
元気を目當り
息を引込ミ胸
胴へ気太り
声を出して
声を出すを
の如しか減り
かくれるを
よろしく
又ゆるくなると
はなると声を謡の
ひとつさいふ
なり

先一音無謡の息つき大秘伝なり

あらひのよれくぬらるなり
いふ程けいに付ても常にくふうをして調ひなく
ろくむかりハわろくとも口にてゆるさゆ御くし
まいらする也ぬすまえるなる御ふみくわう
さて柾柏とよりすそれなとの心えんもいされ
ぬ不年来の面目あらるとはいはまことに此道成就
の人いさより数ひらき候をすへきものや
右の条々書置害夫道も有まことに先達人の

此條をよく此書付にたよりつねに気をつけて
私に得なて出候すまは由なく無ほ古人の手
をもとりわけ摂州ハ木但馬河井宗以相伝
又みなみにて相伝をうけて有る口伝うけ候事
まさしも由来出書附しるし候て出たん候へき
印ものなり

此家は丹後の名物を集め半流を[illegible]混乱して
与りたりされハ異之

此書者當國武田大膳大夫殿ニ一人相傳有よりかて
世間ニ在る観世家の秘密之書也
貞享二乙丑年八月

當秘中古今相違目録ヲ作リ取捨写ヲ作ル 満秀記

謡極秘傳巻之下大絶

這書ハ海老井林右衛門ヒソカニ古本反古ヲ販ヲ中ニ
写シ伝写シ畢ル時百延元暦の年卯月
吉日 新建郡 満秀

出演の出物あひしらい事

一 ヒラキ　ヤハラカ
一 ヒラキテ　ヤハトリカ
一 ヒラキテ　ヤハトリカ
一 ヒラキテ　ヤハラカ
一 ヒラキテ　ヤハトリカ
一 ヒラキテ　ヤトリカ
一 ヒラキテ　ヤハトリカ

右通一点毎ニ謡の名目ニ出演の名目を
ヒラキ　ヤハラカ　ヤハトリ　ヤトリ　ヤハ　ヤ
半写ス　右何の格式ニハ無之候ハ　満秀記